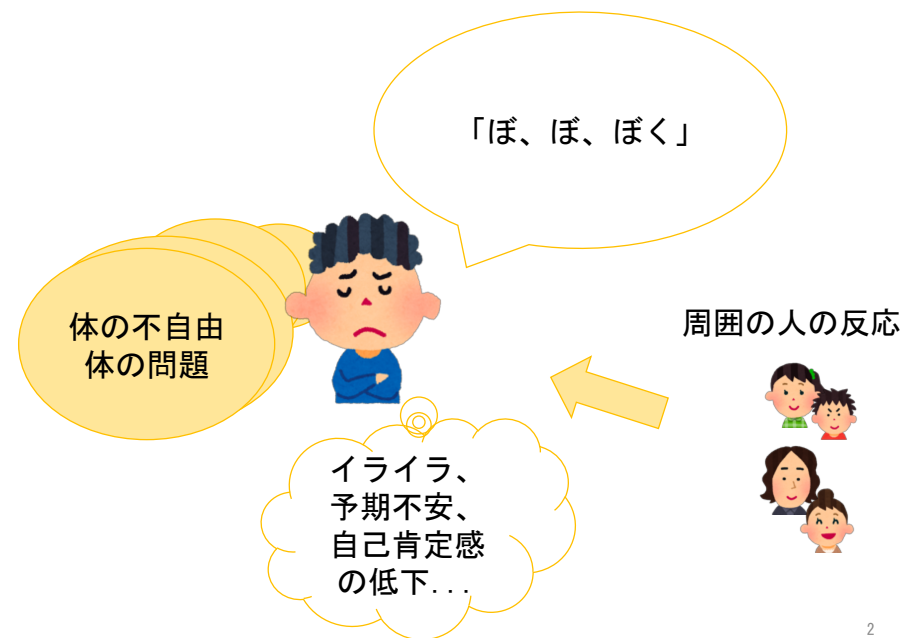


吃音臨床はじめの一步

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系

小林 宏明

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。



今日のお話の概要

- ① 研究や臨床実践の動向
- ② 当事者や保護者のかかえる困難
- ③ 当事者や保護者を支える支援体制の提案
- ④ 当事者や保護者への支援における言語聴覚士の役割

吃音の臨床を始める
言語聴覚士としての

言語聴覚士による
吃音のある方への臨床の

はじめの一步

① 研究や臨床実践の動向

疫学

- 出現率
 - 幼児期 5%
 - 学齢期以降1%

原因論

- 多因子遺伝が推定
- 脳の機能的構造的
問題の関与が推定

近年の研究で得られた知見

合併しやすい問題

- 構音障害、クラタリング、知的障害、学習障害、ADHD、場面緘黙、トゥレット症候群など
- 社交不安障害、不登校など

5

6

臨床実践の動向

吃音臨床の パラダイム シフト

吃音の言語症状の消失・軽減



吃音のために生じる困難の
解消・緩和

困難

- 活動の制限
- 参加の制約
- QOLの低下

感情・態度

- 意識、とらえ方
- 不安、回避
- 自己効力感

環境

- 吃音への理解
- 吃音への対応
- 偏見、からかい

7

様々な臨床技法の開発



環境調整法

- 発話環境の調整
- 育児環境全般の調整

リッカム・プログラム

- 流暢な発話を強化する行動療法
- 言語的随伴刺激



流暢性形成法

- 吃音になりにくい発話の習得を目指す行動療法

DCモデル

- 要求と能力の分離を少なくする
- 間接的・直接的

8

様々な臨床技法の開発



吃音変容法

- 吃音への直面
- 吃音の不安の軽減・緩和

統合的アプローチ

- 流暢性形成法と吃音変容法を組み合わせる



認知行動療法

- 吃音への認知の変容を狙う
- 不安の緩和軽減

年表方式のメンタルリハーサル法

- 吃音の失敗体験の記憶のイメージを変化させる

その他、DAF、FAF、メトロノーム、VR、マインドフルネス、等々⁹

多様な支援の取組



吃音理解教育

- 吃音の啓発
- からかいなどへの仲裁

合理的配慮

- 方法の変更
- 評価の変更
- 課題の変更



障害者福祉

- 手帳の交付
- 就労支援

当事者同士のつどう場

- 中高生のつどい
- セルフヘルプ・グループ



10

② 当事者や保護者の かかえる困難

思うように
話せない
イライラ

予期不安

恥ずかしい、
だめなこと

自己効力
感、自尊心
の低下



11

12

学校

教科書の音読

発表

プレゼン

かけ算九九

英語のオーラル

健康調べ

卒業式

日直当番

委員会

卒論発表会



プライベート

大勢でのおしゃべり

合コン

雑談

かけ声

町内会

冠婚葬祭

注文



職場

朝礼

面接試験

電話

飲み会

セールストーク

配置転換

プレゼン



原因が自分にあると思う
(育て方、遺伝)

周囲（家族、専門家など）から育て方のまずさを指摘

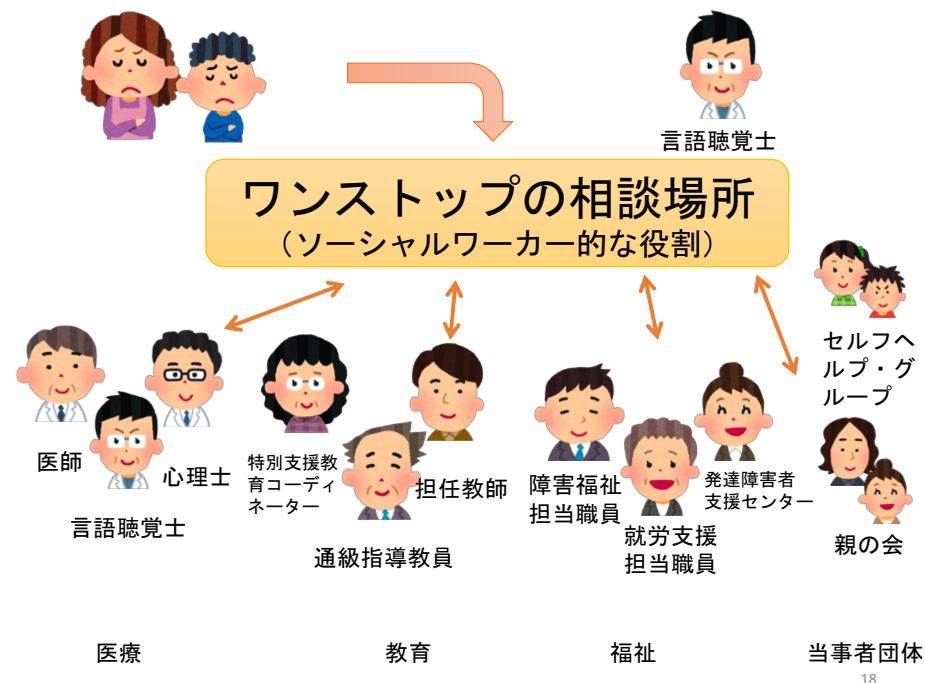
将来への不安
(治るか、からかい、学校生活、就職)

周囲（家族、園、学校など）の無理解

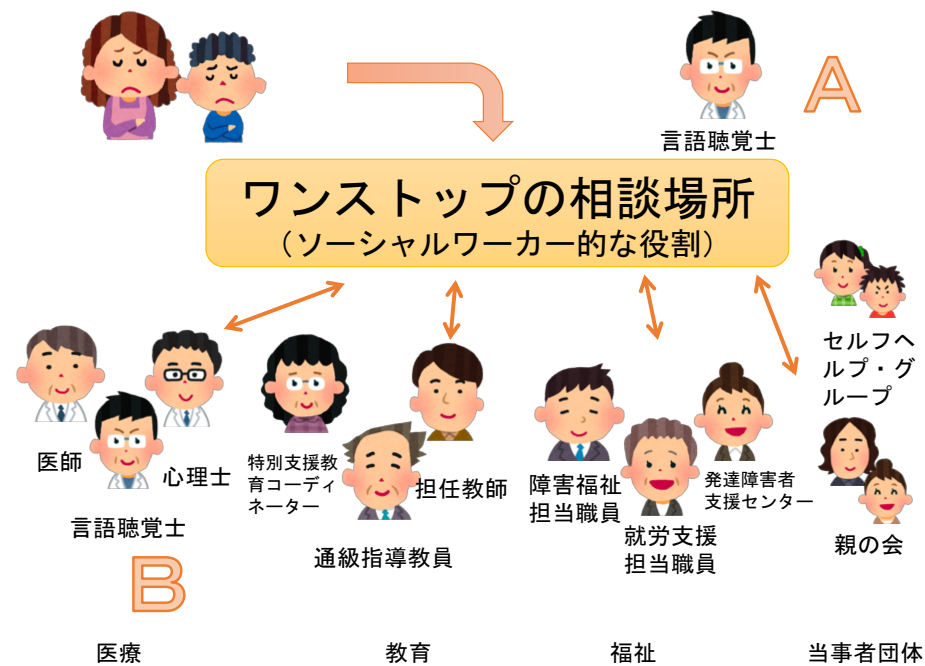
子どもとの接し方
(吃音を指摘する?、どう話す?)



③ 当事者や保護者を支える支援体制の提案



④ 当事者や保護者への支援における言語聴覚士の役割



A はじめての相談相手

- 本人、保護者の話を傾聴する。特に、
 - 吃音の困り感について
- 吃音についての正しい情報を伝える。特に、
 - 保護者 保護者の育て方の問題ではない
 - 本人 悪いこと、いけないこと、ダメなことではない
- 吃音についての包括的な評価をする。
- 吃音への対処の最初の一手を考える。まずは、
 - 環境調整

21

Q 言語症状の改善は必要ない？

小林の考え

- 吃音による生活の困難の解消策の1つになりうる
- 「言語症状をなくす」ではなく、
 - 既にある発話の流暢性に自ら気づき、増やす
 - 吃音が出にくい話し方のコツをつかむ
 - 自身の吃音の特徴（発話面、心理面、他者の捉え）を知る
 - 発話時の不安や緊張を減らす

23

吃音臨床の手引き

- 初めてかかわる方へ 幼児期から学童期用 -

インテーク版 ver.2.1

監修
日本吃音・流暢性障害学会
ガイドライン作成 ワーキンググループ

日本吃音・流暢
性障害学会HP

<http://www.jssfd.org/dl/170824.pdf>

B 発話のリハビリのプロ

- 適切な臨床方針や手法を提案する
 - 自身で臨床を実施
 - 他の専門家に紹介
- いくつかの手法を習得する
- 専門機関同士のネットワークを構築・活用する

24

参考文献 (1/3)

- ・ スライド6
 - ・ Shimada, M., Toyomura, A., Fujii, T., Minami, T. (2018) Children who stutter at 3 years of age: A community-based study. *Journal of Fluency Disorders*, 56, 45-54.
 - ・ 酒井奈緒美, 菊池良和, 小林宏明, 原由紀, 宮本昌子, 須藤大輔, 森浩一 (2018) 3歳児および3歳6か月児健診における吃音の有症率. *音声言語医学*, 59, 61.
 - ・ Guitar, B. (2014). *Stuttering*. Baltimore, Lippincott Williams & Wilkins.
 - ・ 森浩一 (2018) 小児発達性吃音の病態研究と介入の最新の進歩. *小児保険研究*, 77, 2-9.
 - ・ Etchell, A. C., Civier, O., Ballard, K. J., & Sowman, P. F. (2018) A systematic literature review of neuroimaging research on developmental stuttering between 1995 and 2016. *Journal of Fluency Disorders*, 55, 6-45.
 - ・ 菊池良和 (2015) エビデンスに基づいた吃音支援. *心身医学*, 55, 1104-1110.
 - ・ Iverach, L., & Rapee, R. M. (2014) Social anxiety disorder and stuttering: current status and future directions. *Journal Fluency Disorders*, 40, 69-82.
 - ・ 菊池良和, 梅崎俊郎, 山口優実, 佐藤伸宏, 安達一雄, 清原英之, 小宗静夫 (2013). 社交不安障害 (social anxiety disorder : SAD) を併発した発達性吃音症の1例. *音声言語医学*, 54, 35-39.
 - ・ 富里周太, 大石直樹, 浅野和海, 渡部佳弘, 小川都 (2016) 吃音に併存する発達障害・精神神経疾患に関する検討. *音声言語医学* 57, 7-11.
 - ・ 島守幸代, 伊藤友彦 (2011) 知的障害児・者の吃音研究 ― 最近の吃音研究の動向からみた今後の課題 ―. *東京学芸大学紀要. 総合教育学系* 62, 23-31.
 - ・ 小林宏明, 川合紀宗 (2013) 特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援. *学苑社*.
 - ・ 高木潤野 (2017) 学校における場面臆熱への対応:合理的配慮から支援計画作成まで. *学苑社*.

25

参考文献 (2/3)

- ・ スライド7
 - ・ 小林宏明 (2011) 学齢期吃音に対する多面的・包括的アプローチ ― わが国への適応を視野に入れて ―. *特殊教育学研究*, 49, 305-315.
- ・ スライド8~9
 - ・ Guitar, B. (2014). *Stuttering*. Baltimore, Lippincott Williams & Wilkins.
 - ・ Sonnevile-Koedoot, Caroline de, Elly Stolk, Toni Rietveld, and Marie-Christine Franken. (2015) Direct Versus Indirect Treatment for Preschool Children Who Stutter: The Restart Randomized Trial. *PLOS ONE* 10, 1-17.
 - ・ 坂田善政, 吉野真理子 (2017) 環境調整法と流暢性形成法を組み合わせた介入の後に リッカム・プログラムの導入を試みた幼児吃音の1例. *コミュニケーション障害学* 34, 1-10.
 - ・ 坂田善政 (2015) 成人吃音の臨床. *言語聴覚研究*, 12, 3-10.
 - ・ 坂田善政 (2012) 成人吃音例に対する直接法. *音声言語医学*, 53, 281-287.
 - ・ 川合紀宗 (2010) 吃音に対する認知行動療法的アプローチ. *音声言語医学* 51, 269-73.
 - ・ 都築澄夫 (2015) 間接法による吃音訓練 自然で無意識な発話への適応的アプローチ ―環境調整法・年表方式のメンタルリハーサル法. 三輪書店.
 - ・ 酒井奈緒美, 森浩一, 小澤恵美, 餅田亜希子 (2006) 耳掛け型メトロノームを用いた吃音訓練-成人吃音者を対象に-. *音声言語医学* 47, 16-24.
 - ・ Beilby, J. M., Byrnes, M. L., & Yaruss, J. S. (2012). Acceptance and Commitment Therapy for adults who stutter: psychosocial adjustment and speech fluency. *Journal of Fluency Disorders*, 37, 289-299.
 - ・ Brundage, S. B., Brinton, J. M., & Hancock, A. B. (2016). Utility of virtual reality environments to examine physiological reactivity and subjective distress in adults who stutter. *Journal of Fluency Disorders*, 50, 85-95.

26

参考文献 (3/3)

- ・ スライド10
 - ・ 小林宏明, 川合紀宗 (2013) 特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援. *学苑社*.
 - ・ Blood, G. W., Boyle, M. P., Blood, I. M., & Nalesnik, G. R. (2010) Bullying in children who stutter: speech-language pathologists' perceptions and intervention strategies. *Journal of Fluency Disorders*, 35, 92-109.
 - ・ 菊池良和 (2014) 吃音のリスクマネジメント 備えあれば憂いなし. *学苑社*.
- ・ スライド12~16
 - ・ 小林宏明. (2015) 「吃音」に対する心理面も含めた理解と学校現場における対応. *実践障害児教育*, 2014年1月号, 20-23.
 - ・ 小林宏明. (2013) 学齢期吃音の指導・支援 改訂第2版. *学苑社*.
 - ・ 北川敬. (2017). 成人吃音とともに: 文章と写真と映像で、吃音を考える. *学苑社*.
 - ・ 伊藤亜紗 (2018). どもる体. *医学書院*.
 - ・ 堅田, 利. (2018). 「吃音」の正しい理解と啓発のために〜キラキラを胸に〜. *海風社*.
- ・ 23ページ
 - ・ 大橋佳子 (2008) 日本の吃音治療の現状:直面する課題と未来への展望. *コミュニケーション障害学* 25, 111-20.
 - ・ 大橋佳子 (1993) 吃音幼小児に対する発達支援の方法. *聴能言語学研究*, 10, 211-18.
 - ・ 堀彰人 (2018) 幼児期吃音に関する初期の相談の現状と課題 (1). *植草学園短期大学研究紀要*, 19, 15-25.

27



きつ音にこまる
みなさん

成人の方



保護者の方

担任の先生方

ご質問・ご意見は
kobah@kitsuon-portal.jp まで

さらに詳しい情報は
<http://www.kitsuon-portal.jp/>

吃音ポータルサイト |

検索

28